

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月11日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22792220

研究課題名（和文） 病気や障害をもち入院する子どものきょうだいへの影響と支援

研究課題名（英文） Influence of Siblings as a Result of Children's Hospitalization with Illness

研究代表者

新家 一輝 (NIINOMI KAZUTERU)

大阪大学・大学院医学系研究科・講師

研究者番号：90547564

研究成果の概要（和文）：研究目的である、きょうだいへの影響と支援の効果について、きょうだい自身の認識を通して調査し明らかにすることについて。前所属大学医学部附属病院にて、入院児のきょうだいを対象としたワークショップの定期開催を開始した。ワークショップに参加しての効果について調査と参与観察をおこなった結果、ワークショップ参加による直接の効果と、参加がその後のきょうだいと医療者との関わりの架け橋になることが考えられた。一方の研究目的である、母親の認識を通したきょうだいの状態について、きょうだい辛い経験をされる中で遂げている人格的成長の様相と属性・背景因子との関連について調査分析し、その結果を論文投稿準備中である。

研究成果の概要（英文）：The participants in this study were siblings and parents of children with illness hospitalized in the Chubu district of Japan. First, a questionnaire survey was conducted with parents of siblings to understand their intension about holding the workshop for siblings. Second, the workshops were held with the following purposes; siblings can play a leading role, pass message from the medical staff that "You are important", and give them accurate information about living in and situations about the ward where siblings cannot enter. The activities were composed of cooking, games, and a quiz about the ward. Third, after the workshops were held, siblings and parents were asked for their impressions and feelings about the workshop to examine its effects. After workshops were held, many positive responses were given from siblings and parents; "I really want to come next time!" " She (sibling) perhaps could feel familiar towards the hospital through the activities and having contact with the medical staff." and other similar comments were observed. Knowing about their siblings by having good conversations with their parents daily and by continuing to hold the workshop periodically, we aim to support siblings who are members of a family.

The results of survey analysis is conducted about the relation of the aspect of personal growth, and the attribute and the background factor which have been accomplished while having an experience that siblings are in diversity, about the condition of the sibling through a mother's recognition, is under preparation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：小児看護学、きょうだい支援、家族看護学、入院児のきょうだい

1. 研究開始当初の背景

小児を対象とする臨床では、母子関係の重要性が認識され、入院児と母親の精神的な側面を考慮し、母親が入院に付き添うことが必要な場合が少なくない。しかし、近年は家族機能の変化や危機対応能力の脆弱化が指摘され、入院児のきょうだいが受ける影響は大きくなってきている。それにも関わらず、きょうだいへの支援体制は、医療の目が届きにくいこともあって、十分には整っていない。

(1) 母親の認識を通じた、入院児のきょうだいへの影響

きょうだいへの支援に関連する研究は、これまでに徐々に増えてきているが、母親の認識を通じたきょうだいの姿に注目したものが多い。

米国では、1970年代後期よりがんを持つ小児のきょうだいへの影響<sup>12)</sup>、小児の入院がきょうだいに及ぼす影響に注目が向けられ<sup>5)</sup>、きょうだいが不安や抑うつ、家族や友人から隔離感を持つことなどが、母親の認識から明らかにされてきた。わが国では、1980年代後期より注目が向けられ、小児の入院がきょうだいに及ぼす影響やきょうだいの生活状況に関する研究<sup>10)</sup>、がんを持つ小児のきょうだいへの影響<sup>7)</sup>、といった先行研究から、きょうだいへの支援の必要性が徐々に示唆されてきた。

a. きょうだいに起こる否定的な変化

我々は、先行研究の記述を参考に、市販のCBCL/4-18(Child Behavior Checklist)日本語版<sup>4)</sup>を使用し、母親の認識を通じた、きょうだいに起こる否定的な変化の程度について調査した。そして、否定的な変化に関連する属性・背景因子の分析から具体的な支援の方向性を示唆してきた<sup>9)</sup>。しかし、CBCLは入院児のきょうだいの変化に特化したもので

はなく、変化全体を網羅できない。そこで私は、平成21年度若手研究(スタートアップ)の助成を受け、内容分析<sup>6)</sup>の手法を用いて、きょうだいに起こる否定的な変化の全体的な内容を改めて明らかにし、さらにその変化の程度を測定できる尺度開発のための研究開始に備えている。

b. きょうだいに起こる肯定的な変化

きょうだいは、小児の入院という逆境の中において、否定的な変化を起こすだけでなく、がんばり努力し肯定的な変化をみせている。先行研究においても、きょうだいには思いやる気持ちができたり<sup>10)</sup>、自立心が芽生える<sup>1)</sup>といった記述が徐々に増えてきてはいるが、わが国・欧米ともに少なく、その様相は明らかにされていない。また、きょうだいに起こる否定的な変化と肯定的な変化の両側面からきょうだいの変化に注目した研究も少ない。

そこで我々は、母親の認識を通じた、きょうだいに起こる肯定的な変化の全体像を内容分析<sup>6)</sup>の手法を用いて明らかにしてきた。そして現在は、「入院児のきょうだいの人格的成長尺度」を作成し<sup>8)</sup>、属性・背景因子との関連性や否定的な変化との関係性について明らかにするための研究に取り組んでいく。

(2) きょうだい自身の認識を通じた、入院児のきょうだいへの影響

きょうだいへの支援を確立していくためには、きょうだい本来の状態を把握する必要がある。そのためには、母親の認識を通じたきょうだいだけでなく、きょうだい自身が認識するきょうだいの状態について明らかにしていく必要がある。

きょうだい自身を調査対象とした研究は、これまでに米国では取り組まれてきたが<sup>2),3)</sup>、

いずれも量的研究デザインを主にしており、質的帰納的な方法で、きょうだいの認識を調査したものは少ない。そのため、きょうだいに起こる変化の様相が詳細には解明されていないまま研究が積み重ねられてしまっている。

### (3) きょうだいに起こる変化のプロセス

きょうだいへの支援の質を向上させていくためには、きょうだいの変化のプロセスに合せ、具体的な支援が適切な時期に提供される必要がある。これまで、入院児のきょうだいに起こる変化のプロセスについて分析した研究は、5名の母親に対して横断的なインタビュー調査を行った報告はみられるが<sup>12)</sup>、国内外ともに非常に少ない。また、入院中、または退院後も縦断的にきょうだいの変化を追った研究は非常に少ない。

## 2. 研究の目的

(1) 小児の入院と母親の付き添いによるきょうだいへの影響について、きょうだい自身の認識を通して調査し、質的帰納的方法を用いてその様相を明らかにする。

(2) 入院児の退院後も含め、きょうだいが受ける影響を縦断的に調査し、きょうだいに起こる変化のプロセスを明らかにする。

(3) きょうだい自身の認識を通じたきょうだいの状態と、我々がこれまでに研究してきた母親の認識を通じたきょうだいの状態についての研究成果、そして他の先行研究結果とを統合し、入院児のきょうだいへの全般的な支援のあり方と方向性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) きょうだいへの影響と支援の効果について、きょうだい自身の認識を通して調査し明らかにすることについて、前所属大学医学部附属病院にて、入院児のきょうだいを対象としたワークショップの定期開催を開始した。ワークショップに参加するにあたっての養育者の意向と、会開催の効果について、きょうだいおよび養育者を対象に、会後の質問紙と参与観察による家族の様子や言動について調査した。会は週末半日を利用し、食事作りや各自の発達段階を加味した遊び、立ち入り制限のある病棟内での生活の様子や正確な情報が伝わることを目的とした病棟に関するクイズ等を行ってきた。スタッフは、看護師、CLS、保育士、医師、学生。

本研究は名古屋大学医学部生命倫理審査委員会の承認を得て実施している。

(2) 母親の認識を通じたきょうだいの状態について、きょうだいが辛い経験をされる中で遂げている人格的成長の様相と属性・背景因子との関連について質問紙調査したデータを分析し、を本研究期間内にその分析結果

を論文投稿準備中である。

具体的には、無作為抽出した全国400床以上の病院のうち協力を得た63病院において、小児の入院に終日付き添っている母親279名(調査票回収率49.3%)。入院児の入院期間が1年未満である場合を有効回答とし、きょうだいが複数いる場合は、特定の一人について回答を得た。調査内容:小児の入院と母親の付き添い開始以降にみられた、入院児のきょうだいの肯定的な変化の内容について、母親の認識を通して調査し、Krippendorffの手法を用いた内容分析で得た、「心配する気持ちができた」や「入院児やきょうだいの面倒をみるようになった」といった変化の内容26項目について<sup>2)</sup>、「全くあてはまらない」～「非常によくあてはまる」の4件法で調査した。**分析方法:**調査した26項目に対して、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。そしてその他、尺度としての信頼性・妥当性を検証した。倫理的配慮:対象者には、研究内容・結果の公表等を書面にて説明し、対象者自身による調査票の返送によって承諾を得たと判断した。また、大阪大学保健学倫理委員会承認後に調査を開始した。

## 4. 研究成果

(1) きょうだいの会開催にあたっての意向調査から、「一緒にすごしたい」「弟自身が病院のことについて知りたい」「病院の話題に入れないのがさみしそう」「他の子と話ができれば」等の意見があった。初回のH22年7月からこれまでに4回開催(2回/年)し、参加したきょうだいは延べ25名16家族。実施後の質問紙調査より、きょうだいからは「たのしかった」「また来たい。すぐにでも来たい!!」「またクイズやりたいです」、養育者からは「最初は緊張していましたが、とても楽しそうでした」「友達ができて名前を覚えてもらいとてもうれしそうでした」「とても楽しんでいて、そんな姿をみるのができてよかった」といった概ね肯定的な意見があった。会開催をきっかけに、きょうだいのことについてスタッフに話される養育者や、スタッフときょうだいとのやり取りが続いているケースもあり、継続的な会開催に意味と意義があると考えられた。

小児の入院と母親の付き添いによるきょうだいの肯定的な変化について、母親の認識を通して調査し、Krippendorffの内容分析の手法を用いて、その内容を明らかにした。その結果、きょうだいの肯定的な変化においての記述201件から抽出された368記録単位は93コードに分類され、そこから26サブカテゴリーに類型化され、最終的に【現状の把握】  
【情動の変化・成長】【肯定的な行動の変化・

増進】【情動のコントロール・抑制の増進】【自立的行動】の5テーマが形成された。きょうだいは、小児の入院という家族にとっての逆境の中において、辛い気持ちや寂しい気持ち、不安といった否定的な感情を抱きながらも、入院児や家族のために頑張ろうと肯定的な変化もしている。きょうだいの肯定的な変化に注目し、その姿を認めねぎらっていく。きょうだいは、小児の入院という家族にとっての逆境の中において、辛い気持ちや寂しい気持ち、不安といった否定的な感情を抱きながらも、入院児や家族のために頑張ろうと肯定的な変化もしている。きょうだいの肯定的な変化に注目し、その姿を認めねぎらっていくことの、きょうだいが抱える否定的な変化の緩和に繋がって行くことを示唆した。

この26項目のサブカテゴリーの回答分布をきょうだいの年齢別にみると、0歳と1歳の平均得点がそれぞれ30点台で、2歳以上に比べて得点に落差があったため、2歳未満を除外して分析を行った(N=254)。26項目について、最も解釈が妥当であった3因子を採用し、因子負荷量が.40未満の項目を除外しながら分析を繰り返した。この結果4項目が除外され、最終的に残った22項目を『入院児のきょうだいの人格的成長尺度』と命名した。3つの各因子について、「いたわる気持ちができた」「励ますようになった」などから成る第1因子を「愛他的行動」因子、「情緒豊になった」「自分の気持ちや意思を表出できるようになった」などから成る第2因子を「情緒・社会的スキルの発達」因子、「我慢強くなった」「甘えたり、わがまを言わなくなった」などから成る第3因子を「セルフコントロール」因子と命名した。各因子について、小児看護学と臨床心理学の専門家からなる研究チームによって項目内容を吟味し、妥当性を確認した。また、回転前累積寄与率=58.6%、因子間相関=.60~.72、KMO=.94であった。本尺度22項目におけるCronbach's  $\alpha$  =.95で、下位3因子では $\alpha$  =.83~.93であった。以上のことから、構成概念妥当性、内容妥当性、標本妥当性が確認され、信頼性も十分確保されていると判断できる。このことより、『入院児のきょうだいの人格的成長尺度』は、母親が付き添い入院している小児のきょうだいの、肯定的な変化の程度を測定する尺度として有用であると考えられる。

きょうだいへ入院児の病状説明がなされている方が、入院児のきょうだいの人格的成長尺度得点、他者に対する情緒的・行動的支援得点、セルフコントロール得点が高くなること示された。

きょうだいにとって、入院児の病状を説明されることは、不安、抑うつ傾向という否定的な変化が出現する一方<sup>1)</sup>、入院児の病状や現状を理解し、入院児や家族の大変さを感じ

取ることで、相手に対して思いやる気持ちが芽生え、自分の感情を抑制するなどの頑張りにつながると思えられる。本研究で得た属性・背景因子の関連性への示唆は、支援すべききょうだいの優先順位を決定し、きょうだいの変化に応じた支援を行うために役立つと思えられる。さらに、きょうだいに対する入院児の病状説明や面会制度、付き添い制度のあり方の見直し、母親への精神的支援の充実等を検討する指標になると考えられる。

以上研究成果について現在論文投稿準備中である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①小児の入院と母親の付き添いがきょうだいに及ぼす影響 -母親の認識を通した、きょうだいの肯定的な変化-, 新家一輝, 藤原千恵子, 日本看護科学学会, 30(4), 17-26, 2010年12月, 学術論文, 査読有, [http://mol.medicalonline.jp/library/journal/download?GoodsID=eg4jaons/2010/003004/003&name=0017-0026j&UserID=133.1.184.65&base=jamas\\_pdf](http://mol.medicalonline.jp/library/journal/download?GoodsID=eg4jaons/2010/003004/003&name=0017-0026j&UserID=133.1.184.65&base=jamas_pdf)

②小児緩和ケアにおけるきょうだい支援, 新家一輝, 小児看護, 33(11), 1546-1551, 2010年10月, 解説・総説, 査読無, [DOI無し]

〔学会発表〕(計6件)

①きょうだいが小児がんをもち入院する子どもを対象としたワークショップ, 新家一輝, 佐々木美和, 清水直子, 高野緑, 奈良間美保, 浅野みどり, 第10回日本小児がん看護学会, 432, 2012年12月2日, 会議報告/口頭発表, パシフィコ横浜

②きょうだいの強みとは? -障がいのあるきょうだいをもつ方、きょうだい支援をしている・したい方々で集まり話し合おう-, 白羽知子, 諏方智広, 田倉さやか, 新家一輝, 日本心理臨床学会第31回秋季大会, 2012年9月14日, 会議報告/口頭発表, 愛知学院大学

③入院している子どものきょうだい支援「きょうだいの会」実施報告, 佐々木美和, 新家一輝, 高野緑, 第12回中部小児がんトータルケア研究会, 2012年9月29日, 会議報告/口頭発表, 名古屋医療センター

④Introducing a Workshop for Siblings of Hospitalized Children With Cancer, Kazuteru Niinomi, Miwa Sasaki, Hiromi Noda,

Miho Narama, Midori Asano , 10th International Family Nursing Conference, 209, 2011年6月26日, 国際会議(proceedingsあり)、ICC 京都

⑤すすめよう、きょうだい支援, 新家一輝, 安道涼菜, 清田悠代, 関富晶子, 小川純子, 清川加奈子, 第8回日本小児がん看護学会プログラム総会号, 170, 2010年12月18日, 会議報告/口頭発表、大阪大学

⑥小児がんをもつ子どものきょうだいを対象としてワークショップの導入, 新家一輝, 佐々木美和, 野田弘実, 第10回中部小児がんトータルケア研究会抄録, 2010年10月2日, 会議報告/口頭発表、名古屋医療センター

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

新家 一輝 (NIINOMI KAZUTERU)

大阪大学・大学院医学系研究科・講師

研究者番号：90547564